

研究論文

ポストモダンからトランスモダンへ

— 現在社会のとらえ方の転換点 —

From Postmodern to Transmodern: A Great Paradigm Shift

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

キーワード：トランスモダン、ポストモダン、ヨーロッパ・ドリーム

Key Words : Transmodern, Postmodern, European Dream

Abstract :

There has arisen the transmodern paradigm countering postmodern theory which is criticized for bringing about social chaos under the cloak of “collapse of the grand narratives” (Lyotard,J.). This paper presents a steady stream of this paradigm shift which is occurring already in the form of silent revolution in the consciousness of many people in the movements of “Cultural Creatives” or as a claim of “European Dream” instead of American Dream.

I. 序—問題の所在

現在の社会をどうとらえるかについて、近年、世界的に提起されている考え方に、それをトランスモダンととらえるものがある。

近代社会を「モダン・ポストモダン」の概念軸でとらえるものでは、周知のように、圧倒的に多くの場合、これをポストモダンの社会ととらえるものとなっているが、トランスモダン論者によれば、それは、現在では全く時代遅れで、妥当性がない。現在の社会は、ポストモダンの時代を過ぎ去り、トランスモダンの時代・社会に移行しているというのである。全般的にみて、こうした見解は今や世界的に着実に広まりつつあり、現在社会のあり方を論じる場合には避けて通ることができないものとなっている。

では、トランスモダン論とはどのようなものか。トランスモダン論についての大綱的現況は別稿 (Q4) で論じているので、詳しくはそれをみていただきたいが、本稿筆者のみるところ、トランスモダン論は一元論的なものと多元論的なものとに大別される。

一元論的トランスモダン論は、トランスモダン論の本来の提唱者といわれるスペインの哲学者・フェミニズム論者、マグダ (Magda,R.M.R.) の 1989 年の論著 (文献 M1) に始まるものである。それは直接的には欧米先進諸国を対象としつつも、時代・社会を根本的には一元論的なものとしてとらえ、その基本的推移はヘーゲル弁証法により説明されうるものとして、いわゆる

近代社会は「テーゼとしてのモダン→アンチテーゼとしてのポストモダン→ジンテーゼとしてのトランスモダン」へ止揚してゆくと主張するものである。

多元論的トランスモダン論は、メキシコのラテンアメリカ解放哲学論者、ドゥッセル (Dussel,E.) により 2004 年の論考 (文献 D2) で提起されたものである。それは旧来植民地であったような発展途上国や新興国でそれぞれ保持されて来た伝統的文化の振興と異文化交流の推進を立脚点として、トランスモダンとは、そうした伝統的文化がトランスモダン化されたものと、欧米文化のトランスモダン化されたものが並存する社会であり、これにより真の異文化交流は可能になると考えるものである。

この考えは、その後 2009 年カリフォルニア州立大のグロスフォーゲル (Grosfoguel,R.; 文献 G2) によってさらに補足的深化がはかられているが、ドゥッセルをもってトランスモダン論の創始者とする見解もある (H1,p.1)。ただしドゥッセルも、トランスモダン社会への移行が原理的にはマグダの前記弁証法トリアーデ論により説明されうるものとする点では、立場を同じくする (A2,p.206)。

こうした事情もあり、トランスモダン論の方向や内容は今日では論者により異なり、一様ではないが、少なくとも次の点は、これを原理上一致して主張するものとなっている。それは、ポストモダン論について、社会に対しならかの否定的な影響を与える (与えている) ものとして批判、糾弾、排撃する立場にたち、それに代えてトランスモダンの考え方が必須なものとなっている

とする点である。

もちろんその場合、ポストモダン論を否定し排撃する強さのいかんや根拠のいかん、従ってポストモダンの超克のうえに築かれるトランスモダン社会の姿や形のいかんについては、見解は多様である。

例えばポストモダン社会の位置づけについても、トランスモダン論者のなかには、それをモダン社会あるいはトランスモダン社会と並ぶとは考えないもの、すなわち、モダン社会以後における1つの独自の段階としてポストモダンというような時代・社会はなかった、ポストモダン社会といわれるものは、精々モダン社会あるいはトランスモダン社会の一部あるいは一要素をいうだけのものであるという見解も結構ある。こうした見解によれば、トランスモダン社会は（ポストモダン社会からではなく）モダン社会から生まれ、モダン社会から直接移行しつつある新しい社会と考えられることになる。

こうしたいわばポストモダンの全くの否定論は別として、ポストモダンを一応認めるものにおいてもほとんどのものが、ポストモダンという考え方はすでに有効期限が切れ、それに続く考え方（thought following the periodization of postmodern）が必要になっているという立場にたつ（H1,p.1; H2,p.1）。

これに対してポストモダンの肯定的な考え方や、積極的意義を認めるものもある。これらのものの大要は、本稿筆者としては別拙稿（Ω2.3, 5）で論述しているのだから、それをみていただきたい。

本稿では、トランスモダン論のなかでも基本原理的なものと考えられる、マグダ説に代表される一元論的トランスモダン論に論述対象を限定し、ポストモダン論からトランスモダン論が生成してきた経緯を明らかにするとともに、上記別稿（Ω4）で取り上げられなかったトランスモダン論のいくつかの論説について大要をレビューし、ポストモダンからトランスモダンに至る理論の流れについて究明することを課題とする。

なお、本稿で対象とする所説のなかには、例えばポストモダンについて、これを正確にはポストモダニズムとして論じているものもある。これに関連した用語について、本稿ではカリニコス（Callinicos, A.; 文献 C1, pp.2-3）に依拠し次のように考えていることをお断わりしておきたい。

例えばモダンの場合（以下ポストモダン、トランスモダンについても同様）、モダンをいわば総称的用語とし、そのなかにおいて、社会の下部構造にあたる生産様式等についてのそれはモダニゼーション（modernization）、社会の上部構造にあたる文芸や芸術等についてのそれはモダニズム（modernism）、その中間にある生活様式等はこれをモダニティ（modernity）として区別するものである。ただしこの場合、モダニゼーション、モダニズム、モダニティがそれぞれどの範囲のものをいうかは論者により異なり、確定したものがあるのではない。

以下本稿ではこのことを前提として、モダン、ポストモダン、トランスモダンを総称的用語として用いるが、取り上げる論者

のいかんにより、モダニズム、ポストモダニズム、トランスモダニズムなどの用語を適宜使用する。

ところで、トランスモダン論の生成の直接的契機となったのは、トランスモダン論のいわば枠外において展開されたポストモダン論に対する批判論である。ここではジェイムソン（Jmaeson, F.）とシン（Singh, P.R.）の所説を取り上げる。最初に、「カルチュラル・ターン論」（文献 J2）で有名なジェイムソンの所論について、その「ポストモダニズムと消費者社会」論を中心に、ポストモダニズム批判論の概略を管見する。

なお、参考文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

II. ポストモダン批判論（1）—ジェイムソンの所論

ここで対象とするのはジェイムソンの1982年の論考（文献 J1）である。これは、内容的には上部構造としてのポストモダニズム文化の批判的解明に重点があり、ポストモダンも正確にはポストモダニズムをいうものであるが、次の2点を問題意識とするものである。

第1に、ポストモダニズム論の多くは高度モダニズム（high modernism）の諸形態に対してそれぞれ独自の立場から反論すること（specific reaction）を問題意識として生まれたものであると特徴づけている点である。このためポストモダニズム論では、対応するモダニズムがどのようなものであるかによって異なるものとなり、ポストモダニズム論はもともと多様なものであると規定される。

しかしこの場合、ポストモダニズム論では多くが、それまでのモダニズムに対し、それは結局「主体の死」（death of subject）、すなわち「個性の消滅」（end of individualism）をもたらしたものととらえる点では、共通する。それ故、これに対抗するためポストモダニズム論では「個性の復権」が共通のスローガンとなる。それが前記のように、対応するモダニズムのいかんによる多様性と重なって、例えばリオタール（Lyotard, J.）のように「ポストモダンとはこれまで通用してきた大きな物語の終焉の時代」という規定を生んできた（この点について詳しくは後述）。こうした点からポストモダンは、要するに旧来秩序の破壊・崩壊、（人間の）個片化をもたらすものと特徴づけられることになる。

第2点はこの場合、個性の復権は、これまでのモダン時代等で設定されたり強化されてきた社会的あるいは思想的な枠組みや概念の否定、すなわちそれらの枠組みや概念を構成するうえでの境界や差異化（リオタールのいう大きな物語）の打破・崩壊によって可能になると考えられるから、そうした境界・区別の消滅（effacement of boundaries）がポストモダニズムのスローガンになる。このためポストモダニズム論では、例えば文芸の面で見ると、いわゆる高レベルの文芸（エリート文芸）と一般大衆向けの通俗的文芸の間における区別の消滅という主張となって現われる。

しかもこの場合、多くの場合にはエリート文芸を一般大衆化

することがあるべき方向として主張される。というのは、文芸は一般大衆にも容易に理解され受け容れられるようなものになることが望ましいとされるからである。これは文芸の大衆化といえは大衆化であるが、実際的には文芸のマーケティング志向化というべきものである。さらにこの場合看過されてはならないことは、これまでの文芸にあった(とされる)いわゆる難解な事柄や内容について一般大衆化という美名のもとにこれを通俗化し、高度の哲学的、芸術的あるいは文学的な思考はこれを排除すること、すなわち、こうしたいわゆる難解なものを容易に理解してもらえようとする通俗化の技術(のみ)がもてはやされ、発達してきたことである。このことをジェイムソンはポストモダニズム論における「哲学の終焉」(end of philosophy)の傾向とよんでいる(J1,p.2)。換言すれば、ポストモダニズムは真の新しさを創り出す意欲を喪失させる傾向をもつものであったととらえられる。

このうえにたつてジェイムソンは、ポストモダニズム文化の特性は、これを要約して示せば、結局、「模倣」(pastiche)と「統合失調症」(schizophrenia)という2つの言葉で示されるもの以外の何物でもない規定する(J1,p.2)。

模倣は、ポストモダニズム論者たちにおける個性の消滅といっているが、ジェイムソンは「今日の著作家やアーティストたちはもはや新しいスタイルや作風を創り出すことができない。かれらがやっていることは、本質的には、すでにあるものを模倣することばかりであり、精々、旧来別々に提示されていたものについてなんらかの結び付きを図ることだけである。つまり、近代の美的な伝統は死んだのであり、それはポストモダニズム作者には悪夢(nightmare)のような形で存在しているだけのものである」と述べている(J1,p.4)。

このことは、他方では、統合失調症となって現われる。ジェイムソンによると、このことは特に構造主義(structuralism)において問題となるものであるが、構造主義では、物事を示す言葉と、(その言葉の)対象である物事との関連が改めて問われ、そこには一種の神話があるとされるところに問題の根源がある。そしてこの神話性をなくすためには、主観性を重視することが必要とされるから、時にはそれは作者の一人よがりのものとなって、社会的な統合性をもたないものとなる。

これは要するに、1つの用語についての事実との対応関係を含めて、これまで通用してきた当該用語の概念について客観的な妥当性を否定すること、少なくともそれを疑うことを意味し、現実的かつ普遍的な意志疎通を不可能にする。そしてそれによって他方では、実際には関係がないもの同士において関連があるものと強弁され、ありもしない関連性が提示される。今1つの統合失調症状である。

つまり、ポストモダニズム論の統合失調症とは、それによって「現実の世界と無関連な、現実の世界についての訳のわからないような姿(undifferentiated vision of world)が提示されること」をいう(J1,p.7)。そしてそれがポストモダニズム論では高い評価

を得るものとなる。

このうえにたつて、ジェイムソンは「ポストモダニズムの生成は、後期・消費者志向・多国籍的な資本主義(late, consumer or multinational capitalism)の生成・発展と密接に関連したものである。……他方において、なかでもポストモダニズムの最大の問題点を挙げるとすると、それは『歴史的認識の欠如』(disappearance of a sense of history)にある」と結論づけている(J1,p.11)。

以上のジェイムソンのポストモダニズム論について、それがわざわざ「ポストモダニズムと消費者社会」と銘うたれていることに焦点をおいて、その意味を本稿筆者として理解すると、ジェイムソンの主張は次のような社会経済的意義をもつものと考えられる。すなわち、モダン社会は生産中心の社会(生産者社会)であったから、基本的には「優秀な良い生産物は特別に販売(マーケティング)活動をしなくても売れる」と考えることができた。しかし、1960年代～1970年代にいわゆる多品種少量生産の脱フォード主義的生産が一般化するとともに、「良い生産物でも販売(マーケティング)活動をしなくては売れない時代」となり、マーケティング活動が目されるものとなるとともに、マーケティング活動に必須なデザイン・飾り・広告・宣伝・マスコミによる売り込みなどが重要な時代となった。

そうであるが故に、この時代には、人々の耳目を引くものならばなんでもありで、模倣・統合失調も良しとされるどころか、それが他人(企業)の生産物との差別化要因として強く歓迎されるものとなった。そしてそれを反映するのがポストモダニズムであった。ジェイムソンはこのことを指摘しようとしているのである。

ジェイムソンの「ポストモダニズムと消費者社会」論には、本稿筆者の知るところだけでも、ベルガー(Berger,J.;文献B2)やディーナー(Diener,B.A.;文献D1)の論評があるが、この点を抜きにした論評は正鵠を射たものとはならないであろう。

次に、最新のポストモダニズム批判論を紹介する意味もこめて、シンの2011年の論考「消費者文化とポストモダニズム」(文献S3)についてレビューする。シンの論考は、正確には「消費者文化との関連においてポストモダニズム」を論じたものである。内容的には「ポストモダニズムそのもの」について論じた部分と、「消費者文化との関連でとらえた場合のポストモダニズム」について論じた部分とに大別される。本稿でもこの2つの部分に分けて考察する。

Ⅲ. ポストモダン批判論(2) —シンの所論

1. ポストモダニズムそのものに対する批判論

シンは、この論考の冒頭において、ポストモダニズムの概念について、まず「それは論者の違いによって異なった事柄を示すところの、定義が不確定な用語(a slippery term)である」と述べるとともに(S3,p.55)、ポストモダニズムの位置づけ・内容・特色について図1のような対照表を提示し、そして下記のように

ないいくつかの規定を示している。

	モダニズム以前	モダニズム	ポストモダニズム
形而上学 (metaphysics)	リアリズム: 超自然崇拜主義	リアリズム: 自然主義	アンチ・リアリズム
認識論	神秘主義・ 信仰主義	客観主義: 経験的・理性的	社会的主観主義 (social subjectivism)
人間・自然	原罪・ 神の意志に服従	白紙状態の心・ 自律性	社会的な構成と葛藤
倫理観	集団主義: 利他主義	個人主義	集団主義: 平等主義
政治・経済	封建主義	自由資本主義	社会主義
時期・場所	中世	啓蒙主義・ 20世紀の科学・ 事業・技術の分野	後期20世紀 人間性、それと関連した職業

図1：3つの時代の特色 (出所：S3,p.58)

ただしこの場合、前提となっているのはポストモダンの代表的提唱者であるリオタールが「ポストモダンとは旧来の大きな物語の終焉の時代」と規定していることである。このことはすでに一言したところであるが、ここで「大きな物語」というのは、人間の行動や物事の処理で当然基準とすべきものと考えられてきた考え方や原理、例えば合理主義、リベラリズム、性別主義、歴史決定主義などが妥当性をなくし、理論や基準の適用性において力を失ってきていることをいう。

これは、一般的には「区別・境界の消滅」といわれるが、例えば男女別では、旧来、役割、服装、態度、言葉遣い、仕草などにおいて別々のものであり、その区別・境界は堅持されるべきものとされてきたのが揺らぎ、絶対的妥当性をなくしていることをいう。そこでシンは、このうえにたつて、ポストモダニズムそのものの特色として次のような命題を提示する。

第1に、一般にポストモダニズムといわれるものでは、絶対的な真理 (absolute truth) を認めないという考え方にたつ。この点についてシンは次のように書いている。「ポストモダニズム論者たちは、絶対的真理というようなものは存在しないと考えている。というのは、かれらは自分たちの外部にある世界には誤りがあるものと考えためであり、何かの考えについてそれが道徳的に善か悪かについて決めることができるような権威があるものなどはないと考えるためである」(S3,p.58)。従ってこの意味で、ポストモダニズムにおける真理や理論についての考え方は相対主義といわれたり、構造打破的なもの (deconstruct) と いわれたりする (S3,pp.58,59)。

絶対的な真理などはないという考えに基づいて第2に、ポストモダニズムでは、(他人の主張を含め) 物事に対して寛容であるという考えにはたたない (intolerance)。すなわち、自分が正しいと思うことを (それが一般的常識的にみて妥当性を欠くよう場合でも) 押し付け強行しようとする。この結果起きる矛盾にも頓着しないし、社会的な有効性や整合性のいかんも考慮しない。シンによると、ポストモダニズムとは (ある事柄について) 「それが真に有効なもの (true) かどうかは、自分には関係がない」という

立場をとるものである (S3,p.59)。

それ故第3に、ポストモダニズムでは次のように言うことができるものとなる。すなわち「もしモダニズムが神の死をもたらしたものとすれば、ポストモダニズムは自己の死 (death of self) をもたらすものである」(S3,p.60)。これはシンによると、「モダニズム社会では絶対的なものがなく、真理も相対的なものにすぎないとするならば、結局、人間生存上において確実性 (stability) がなく、生きていることの意味がなくなるからである」。ポストモダニズムは、個人の好みを好きなように発揮することを推奨するものであるが故に、利己主義の無限の発揮となり、かえって人間の死をもたらすものと考えられることになる。

このことは地球環境でも人間の勝手な行動を許すものとなり、こうしたことが続けばいずれ人類は集団的に死滅せざるをえないものとなる (collective suicide) という声すら起きるものとなっている (G1,p.39; A2,p.201)。シンのいう「自己の死」はこれに通じる考えである。これはある意味でポストモダニズム論の最大の矛盾であるが、ポストモダニズム論は矛盾の論理に無縁であるが故に、この矛盾を感知することがない。

ポストモダニズムではこのような人間把握のうえにたつて、さらに第4に、人間のアイデンティティ (identity) の喪失が起きるとシンは主張する。この点についてシンは次のように、すなわち、ポストモダニズム論では「現実社会は要するに社会的競争のなかで (優勝劣敗の形で、つまり勝ったものや富めるものの好きなような形で) 形成されるから、社会の (道徳的な) 行為規範は権力者階層 (oppressive power) が仮面をかぶって強制するだけのものとなり、個人的アイデンティティは幻想 (illusion) というものとなる。……その文化は、例えば市民のアイデンティティを失い、社会的ルールに従わないギャングたちのものとなら変わらないものとなる」と書いている (S3,p.60: カッコ内は大橋のもの)。

次に、消費者文化との関連において、シンがどのようにポストモダニズム論を展開しているかをレビューする。

2. 消費者文化との関連におけるポストモダニズム論

ここで消費者文化とは、シンによると「日々変わる消費者行動における好みの変化 (a day to day change in the taste of consumer behaviour)」をいうが、この点についてのシンの主張は、結論を先に示せば次のようにまとめられる。すなわち、こうした日々変わる消費者の文化すなわち好みや考え方は、現在すなわちポストモダニズムの時代にあつては、情報化の強力な進展のもとに、全面的に情報化の影響を受けるものとなっていて、社会的に形成されるものとなっている。この場合、情報の主たる発信者であるマスコミ等ではポストモダニズム論的思考が至上原理をなし、文化帝国主義 (cultural imperialism) を形成する主たる担い手になっているから、消費者文化は要するにポストモダニティ的思考のもとにあるものとなる (S3,p.73)。

以上がシンのこの事柄についての基本的問題意識である。以下ここではこうしたシンの基本的主張を踏まえて、消費者文

化との関連におけるポストモダニズム論についてのシンの所説をレビューするが、その場合、ポストモダン社会では消費領域の比重が高まることは、本稿既述個所においてジェイムソンの所論に関連して述べたところであり、原理論的には同じことがここでも妥当することをお断りしておきたい。

ところでシンは、ポストモダニティにおける消費者文化のあり様を検討するに際し、とりわけジェイムソンなどの所論を踏まえて、ポストモダニズム文化の本質は、結論的には、次の命題によって示されるものとしている。

すなわち、ポストモダン時代の文化は、本質的特徴を一言でいえば、幻影 (simulacra) というべきものである、という命題である。そしてこのことをシンは、今や文化が「誤った、もしくは人を欺くためのイメージ (false or deceptive image) によって支配されたものとなっていることをいうもの」であり、「ポストモダニズム文化ではわれわれは現実とイメージとをまはや区別することができない状態にあり、両者の間では境界が不明確なもの (blur together) となっていることをいう」ものであると説明している (S3,p.74)。ちなみに、ポストモダン時代の文化について、これを幻影 (simulacra) という言葉で表現し特徴づけることは、トランスモダン論の創始者、マグダにおいて行われている (M2,p.10)。

シンのポストモダニズムにおける消費者文化論に戻ると、ポストモダニズム文化に特徴的なメルクマールとして、シンは次の諸点を挙げている。

第1に、文化と社会との区別が消滅していることである。これは上記において、情報化の進展が支配者の文化確立を意味するものととらえられていることを、消費者文化の観点から確認したものであるが、シンはここで、このことを次のように説明している。

すなわち、われわれの現実についての認識、つまりわれわれが自己自身や取り巻く世界をどのように認識するかを支配するものは、ますます通俗的な (popular) 文化的サインやメディアによるイメージとなっている。それ故マスメディアは、往時には社会の動きや姿を反映する(受動的な)鏡であったものであるが、今やそれが逆になり、「現実がマスメディアなど鏡に写っているものによって決定されるものとなり、社会はマスメディアにより支配されたものとなる。それ故そこでは、現実が(マスメディアなど)鏡においてどのように歪曲されたものとなっているかということなどは問題にならないものとなる」(S3,pp.74-75;カッコ内は大橋のもの)。

ポストモダニズム社会では鏡(マスメディアなど)に写っているものによって現実がシミュレートされる。消費者文化はその典型的なものである。それ故シンによれば、「ポストモダニズムのもとでは、経済を通俗的文化から区別することがますます難しくなる」(S3,p.75)。

ポストモダニズムにおける消費者文化の第2の特徴は、(生産物などについて) 実体・実質 (substance) よりも外観・スタイル・見映え (style) に力点が置かれることである。これは上記第1点の情報・標識が社会を支配するものとなるという命題を補完

するものであるが、シンはここで「ポストモダニズム文化で決定的に重要な点は、(本体や中身よりも) 表面的なものやスタイルの良さがより重要なものとなり、デザイナー・イデオロギー (designer ideology)、すなわち“何事もデザインにより決まる”という考え方が支配的なものになることである」と書いている (S3,p.75;カッコ内は大橋のもの)。

その結果、ポストモダニズム文化では、(真の) 芸術 (art) と通俗的文化 (popular culture) との間で区別がなくなる。これがポストモダニズムにおける消費者文化の第3の特徴である。これはいうまでもなく、ポストモダニズムの消費者文化についての第1の特徴と第2の特徴から起きる必然的結果である。

ポストモダン社会ではこうしたことが進行するから、2つのことが起きるし、必要になる。一方では、ポストモダニズム文化ではどのようなものや事柄であってもスタイルや見せかけや表面的なものだけで選ばれるものとなる。そのためのジョーク (joke) や表示物 (reference) や引用句 (quotation) が肝要なものとなって、真の芸術もこうした通俗的な代名詞的な惹句の響きの強さで評価されるものとなる。しかし他方においては、以上のことは消費者の側において強い判断力を持つことが必要になることを、あるいはそうしたことを強く進展させるような社会が出現する必要のあることを意味する (S3,p.77)。

以上のうえにたってシンは、総括的に次のように述べている。「ポストモダニズム文化は、要するに、モダニズム時代に起きたスタイルの古典的諸要素を引き継ぐものである。それだけではなく、そうしたモダニズム的なスタイル志向的な実践行為について、消費者文化を変化させることによってそれを極限まで推し進めたものである。(ブランドなど代名詞的なものや見せかけだけのものによって動かされる) 今日の消費者文化は、ポストモダニズムの運動によって全世界的に急速に広まったのである」(S3,p.84;カッコ内は大橋のもの)。ポストモダニズムが、社会経済的には、合理的生産を進めるものではなく、とにかく売ること志向したものであることは、ここでもはっきり示されている。

トランスモダン論の枠外におけるポストモダン批判論の論調については以上とし、次に、現在社会をとにかくトランスモダンと規定する試みについて考察する。最初にイギリス・オープン大学のムラ (Mura,A.) の2012年の論考「トランスモダニティのシンボリック機能」(文献M3)を取り上げる。結論を先に示すと、ムラの所論は、トランスモダン社会をモダン社会から生まれたものとしてとらえ、ポストモダンといわれるような1つの時代・社会などはないというものである。

それ故ムラの見解によれば、ポストモダン論で主張されているものはトランスモダンの考え方に含まれるものであり、トランスモダンからいえば、トランスモダンはそのなかにポストモダンといわれるもの、あるいはポストモダンの特徴といわれるものを含んだものである。つまり、ムラにあっては、一般にポストモダンといわれるものの特性は、トランスモダンの特性というべきものであって、それらは適宜修正・加工のうえトランスモダン論のな

かに組み入れられ、再生が図られるべきものである。

従ってムラのトランスモダン論では、理論内容的には旧来ポストモダン論の特徴的主張といわれてきたものが含まれ、それと変わらない部分がある。それは確かにポストモダンの否定論ではあるが、ポストモダンのものを認め、それをトランスモダン論に取り入れるという意味での、ポストモダン否定論である。

IV. ポストモダンはトランスモダンの一部という主張—

ムラの所論

1. トランスモダニティの規定

ムラが問題意識とするのは、正確に言えば、現在社会のあり方をディスコース (discourse: 言語による意志伝達: 一般的には会話・対話) の面においてとらえ、モダンとカトランスモダンといわれるもののいわば実体を、ディスコースの仕方の違いとして論究することである。従ってその論考で使用されている用語も、正確には、モダニティ・ポストモダニティ・トランスモダニティであるが、本稿では、冒頭でお断りしているように、モダン・ポストモダン・トランスモダンという用語も適宜使用する。

ムラによると、1つの時代・社会は、端的にはディスコースの仕方の違いとしてとらえられるから、1つの社会とは共通のディスコースが通用する範囲 (temporary closure) をいうものであり、その範囲ではディスコース、すなわち言語による意志伝達が可能なものである (M3,p.69)。故に1つの時代・社会とは、別言すれば、個々のディスコースが通用するところの、その上位概念である「メタ・ディスコース構成体 (discursive meta-structure)」というべきものであり、1つの時代・社会は「ディスコースの沈殿した仕方 (sedimented discursive practices)」が異なることによって区別されるものと規定される。その際ムラは、それぞれの国や地域についてみると、ごく一般的に言えば、現在社会ではさしあたり次の3類型がありうるものとする。すなわち伝統 (的なもの) (いわばモダン以前のもの)、モダニティ (的なもの) (モダンそのもの)、トランスモダニティ (的なもの) (モダン以降のもの) の3者である。

この場合これら3者は、端的には、シンボル (的なもの) (symbolic contexts: horizons: scenarios)、あるいは (上記の) 沈殿物の象徴 (的なもの) (reservoirs) によって区別される (M3,p.69)。例えば西欧の場合、モダニゼーション (近代化) は、産業革命に代表される技術的経済的 (資本主義的) 進歩によって伝統的なものに対して“沈殿脱却 (desedimenting)”を行ない、“沈殿脱却効果 (desedimenting effects)”を獲得したものであるが、この脱沈殿化においてスローガンの役割を果たしたものが、モダニゼーションというシンボルであった。ちなみに、この脱沈殿化がリオタールのいう「大きな物語の終焉」の命題に対抗せんとするものであることは明らかである。

この場合ムラでは、現在における社会・時代の3大類型が伝統 (モダン以前)、モダン、トランスモダン (モダン以降) としてとらえられているところから明らかなように、モダン社会の次に来

るものはトランスモダンの社会・時代であって、ポストモダンのそれではない。従ってポストモダニティといわれるものは、ムラにあっては、定義的にはトランスモダニティのイデオロギー的側面 (a ideological connotation of transmodernity) をなすものにすぎないという位置づけになる (M3,p.77)。

この点についてムラは次のように述べている。「トランスモダニティとポストモダニティとは密接に関連したものであるが、ポストモダニティはトランスモダニティに対し内部的なディスコース的要素 (internal discursive component) を提供する (だけの) ものであり、・・・トランスモダニティは、ポストモダニティに関する社会学的、歴史学的なディスコースを包摂したところの、ならびに、ポストモダン論者たちの政治的、哲学的な諸理論を包摂したところの、より広いディスコース的の道をなすものである」 (M3,p.76: カッコ内は大橋のもの)。

それ故、他の論者ではポストモダニティの特性として挙げられるものでありながら、ムラではトランスモダニティの特性とされるものがある。このうえにたつて、ムラはトランスモダニティの特性について、その糸口となるものはグローバリゼーションのとらえ方であるとして、この問題から論を始めている。ここでもそれに従って、ムラのいうトランスモダニティの特性をレビューする。

2. トランスモダニティの特性

ムラがトランスモダニティの特性としてとにかく第1に挙げるグローバリゼーションは、トランスモダニティ論でも多くの場合、トランスモダンの象徴的な事柄とされているものであるが (例えばマクダ説は典型的、詳しくはΩ4)、それと同時に、ポストモダン論者、例えばハーベイ (Harvey,D.) などにおいても時間と空間の圧縮化 (time-space compression) としてポストモダンの特性として挙げられているものである (cited in M3,p.71)。

このうえにたつてムラは、グローバリゼーションは情報化との関連においてとらえられるべきものであると主張し、それは正しくは空間的隔たりの意味変化 (spatial displacement) とよぶべきものであると規定する。ここで空間的隔たりの意味変化とは、ムラの定義によると、「グローバリゼーションと情報化とにより生まれる二重の動き (double movement)、すなわち (単なる) 空間的移動 (dislocation) のみならず、空間と関連した時間についての認識の再構成をも併せて含むもの」をいうのであり、それをムラは、端的にはハーベイの見解に従い技術進歩による「時間と空間の圧縮化」として特徴づけられうるものとしている (M3,p.71)。ここにはポストモダニティの考え方も取り入れ、それをトランスモダニティ論の一環とするムラのアプローチの特色が良く現れている。

このうえにたつて、ムラは、まず第1に、空間的隔たりの意味変化における空間にはバーチャル空間 (virtual reality) も含まれるとして、バーチャリティがトランスモダニティの重要特性の1つになると主張する。この場合バーチャリティは、「生産技術上およびコンピューター上の人工作品を駆使し、かつ、それ

と人間との交互作用を展開することに基づいて、現実 (reality) を知覚する新しい方法」(M3,p.71)と定義されているが、バーチャリティの進歩、とりわけその技術の進歩により、空間について、それが実際にあるものかどうかや、遠くにあつて認識が困難なものかどうかは問題とならないものとなる。このことはバーチャリティには、単に空間の移動だけではなく、時間の圧縮も含まれていることを意味する。

それ故、社会的かつ空間的に存在するものについて、その実在性を制度化することによって成り立ってきたこれまでの社会のあり方は、その考え方をを変えることを必要とするものとなる。少なくともそうした考え方の変革を助長する。つまりこれは、これまでの社会のあり方について脱沈殿化を余儀なくさせるのである。

第2にムラは、このような空間的隔たりの意味変化によりフラグメンテーション (fragmentation) が進展すると主張する。フラグメンテーションは、ポストモダニズム論では物事が「大きな物語を喪失した存在にあること」、すなわち「全体的関連のない個片的存在になること」をいうものとして中核的命題をなすといっているものであるが、それがムラにあつては全体との関連をもつものとしてとらえ直される。例えば単なる「個片化」から「部分化」という意味をも内蔵するものとして再規定され、しかもトランスモダニティ論の支柱をなすものとして措定される。

すなわちムラでは、フラグメンテーションは、個人と社会との関係において単に個人が社会性を喪失したアトムの存在となったことだけを意味するものではなく、このことによって社会と個人との間の矛盾が強くなり、個人は強度な緊張状態 (hyper-intensification) におかれるものとなることを意味する用語として規定される。ムラはこの点について、「この緊張の絶え間のない進行によって、現在社会における個人は、外部の社会事情 (social-outside) の変化に振り回されて、個人自体の事情 (individual-inside) には目を向けないようにすること (個人的事情を守れないこと) を強制された存在になる」と述べ、そういう意味で個人は、モダン社会では「疎外された主体 (alienated subject) 」であったものが、それを超えてトランスモダン社会では「フラグメンテーション化された主体 (fragmented subject) 」というべきものに転化している、と論じている (M3,pp.74-75; カッコ内は大橋のもの)。

このうえにたつてムラは、この点について結論的に次のように書いている。すなわち、モダンの時代では個人と社会との結び付き、あるいは個人の社会への包摂は、例えばナショナリズム、コーポラティズムあるいは友愛といった考え方で実現が図られてきた。これらが破産した後をうけて、個人と社会についての新しい考え方を提示するものとしてトランスモダン・ディスコースは現れたものであるが、それは要するにフラグメンテーションの考え方を前提とし、内実とするものである。

そしてムラは、トランスモダニズムのイデオロギー的側面、構造的 (structural) 側面、空間的 (spatial) 側面について、次の

ように一般的に説明している。

イデオロギー的側面は既述のように、要するに、ポストモダニズム的ディスコースを取り入れたものであるが、ムラによると、ポストモダニズム的ディスコースは、もともとモダニズム的ディスコースを解体することに志向したものであったが故に、全体としてみればトランスモダニティ的ディスコースのシンボリック機能をもつものとして評価できるところがある (M3,p.78)。

確かにポストモダニズムには文化の通俗化や性関連事項の商品化を進め、「遊び志向の (ludic) ポストモダニズム」という強い側面があるものではあるが、しかし、主体の流動性 (fluid subjectivities) などを促進し、例えば企業の経営理論や組織理論において新しい方向として評価されてきた側面がある。特に多民族関連的な多国籍の企業では新しい考え方として歓迎されてきたところがあり (M3,p.78)、トランスモダニティ論としても全面的に絶対的に否定されるものではないと、ムラは位置づけている。

構造的側面についてもポストモダニティ論のそれは、ムラによると、トランスモダニティ論の発展・展開にとって肯定的なもので、積極的に包摂すべきものがある。ここで構造的側面とは現在社会の構造をどのようにとらえるかを焦点とするもので、ムラは、この点についてみると、ポストモダン論に対する批判は盛んであるが、しかしそれに代わるものを提示したものは少ないとして、結局、「私のトランスモダニティについての概念化は、グローバリゼーションに関連して起きた種々なディスコースを総括したものであり、それはポストモダニティのイデオロギー的、歴史的、構造的な諸次元を改めて規定するところに基礎を置くものである」と述べている (M3,p.79)。

次に空間的側面を取り上げる。ここでムラが指摘するのは、空間的転位としてのグローバリゼーションのトランスモダニティにおける役割・機能である。ここでムラは、トランスモダンにおいてグローバリゼーションが格段に進展することによって、個人とグローバル的外界との関係が新しい拡大された形で進展することによって、これまでのモダン時代の制約等がなくなり、全地球的な行動場面が開かれるものであることを強調している。

これをムラは、これまでの単なる国際的ディスコースから全世界的な普遍的な (universal) ディスコースへの進展としてとらえ、これは用語のうえにも現れているという。例えばモダン時代の用語であった「プロレタリアート」は、トランスモダン時代では「大衆」(multitude) に変わる。これは背後にある労働が肉体労働を中心にしたものから、非肉体的知的労働を中心にしたものへ変化していることを反映したものである、と位置づけられる (M3,p.81)。

他方、空間的隔たりの意味変化としてのグローバリゼーションは、時間についての認識変化も内蔵し、この次元でもフラグメンテーション化を進展させるものであるから、2つの方向を生み促進する。すなわち一方では、グローバルな平等化、つまり同質化傾向を生み促進する。しかしそれと同時に、他方

では、それぞれの地域の特性について、とりわけ当該地域の持つ過去の特性について見直しを招来し、他とは異なった評価をもたらして異質化・非同質化の傾向を強める (M3,p.82)。

これは、これまで古くて価値がないものとされてきたようなものが、新しいグローバルな観点で、すなわちグローバリゼーションにより見直され、新しく評価されることであって、グローバリゼーションの“沈殿脱却効果”の1つである。この意味でもトランスモダン社会は、本項冒頭で述べたところの、伝統・モダン・トランスモダン (そのなかにはポストモダンも含まれる) が一部では重なり合い、並存する社会であると、ムラは最後に力説している (M3,p.83)。

ムラの所論は以上とするが、ムラにあっては、繰り返し述べてきたように、ポストモダンは1つの社会・時代としては存在しないものであり、その限りでは確かにポストモダン否定論であるが、しかしポストモダン論が説く多くの特性は、ムラのいうトランスモダンのなかに含まれており、ムラの試みはそれをトランスモダンにおいて再生させようとするものである。それ故にムラの所論は、総括的にいえば、ポストモダン論からトランスモダン論に至る流れにおいて、いわば両者を橋渡しする試みと位置づけられうるものである。

このうえにたつて次に、オランダ・ワーニゲン大学のツーリズム論者、アテルイエヴィック (Ateļjević, I.) の所論について 2013 年の論考 (文献 A2) を中心に取り上げる。

V. 統一概念としてのトランスモダンの提唱—

アテルイエヴィックの所論

1. 問題の定式化

アテルイエヴィックがこの論考 (A2) でトランスモダン論の発展・展開の観点から問題意識とする点は2点ある。第1は、トランスモダン論が重要な考え方の転換点 (paradigm shift) をなすものであることを指摘し、力説する点である。第2はこのことに関連し、とりわけ次のことを強く主張する点である。すなわち、トランスモダンのパラダイム転換を主張している種々な見解には、現時点 (2013年) では多様なものがあり、そのなかにはトランスモダン (それに同義的なものを含む) という用語を表面に出しているものもあれば、そうでないものもある。しかし、トランスモダンという用語を表面に出していないものでも、実質的にトランスモダン論に属すといっているものがあるから、これらのものを含めて、用語上でもトランスモダン論として統一がなされ、そのうえにたつてトランスモダン論として統一的理論が展開されることが必要になっているという点である。

その場合、トランスモダン論に属すかどうかの基準となる根本的メルクマールは、アテルイエヴィックによると次の認識のいかんである。それは、現在社会では自然環境でも社会環境でもこのまま進めば人類は集団的に死滅せざるをえない (collective death) 点に達しており (A1,p.500; A2,p.201)、この危険を回避するためには人間の意識改革を行なうことが必須であ

る。それも現在ではグローバル的規模での意識改革 (global relational consciousness) が必要である。それはいわば人間歴史における新しいルネサンスといっているものであるが、こうしたことを認識しているかどうかである。

しかも、アテルイエヴィックのみるところでは、こうした動きは一般的にはすでに社会の水面下で世界的に広まっているものである。例えばこうした趣旨にたち、トランスモダン論の有力な担い手とみられるところの、レイ (Ray, H.P.) / アンダーソン (Anderson, S.R.) により提唱されている「文化的創造行為運動」 (Cultural Creatives) は、水面下で静かな革命的な力 (silent revolutionary power) として広く進行している (A1,p.501)。こうした動きを1つのものにまとめ、推進するためにも統一的なシボリックな名称が必要であるが、それは現時点では、トランスモダンが最も適切であるとアテルイエヴィックはいうのである。

こうした現時点でトランスモダン論 (あるいは運動) としてまとめられうるものにはどのようなものがあるか。これについてアテルイエヴィックの考えているものを次項で紹介するが、そのまえにここでアテルイエヴィック自身の理論的立場を述べておきたい (A2,p.202ff.)。

まず、アテルイエヴィックは、マグダによる「モダン→ポストモダン→トランスモダン」のトリアーデ説を可とし、(ヘーゲル弁証法的矛盾の立場にたつて) 「トランスモダンは、モダニティとポストモダニティに対し批判的であると同時に、両者から有用な諸要因を引き継ぐものである」と定義している (A2,p.203)。

しかしこの場合、アテルイエヴィックは、自らが何よりもポストモダン論に対して反対・排撃の立場にたつことを鮮明にしている。これは多くのトランスモダン論者たちと共通するものであるが、この点ではアテルイエヴィックはグヒシ (Ghisi, M.L.) に依拠しつつ次のように述べている (A2,p.203)。すなわち、ポストモダンはモダンに対する反対・排撃を根本的立場とし、かなりの成果を収めてきたものではあるが、しかしポストモダン論が推進してきたところの、とにかくこれまでの考え方や基準を破壊・崩壊するという考え (deconstruction) は、今日では行き過ぎたものとなっており、現在ポストモダン論が推進しているものは、要するに、人々の耳目を引くものであれば“何でもあり” (anything goes) という考えのものとなっていて、自然的・社会的環境の保持だけではなく、人間としての尊厳を保持することすらも危ういものとなっている。

この危険を回避するためには、今やポストモダンの考えを終息させることが喫緊の課題になっているとアテルイエヴィックは言い、例えばリフキン (Rifkin, J.) が次のように述べているところを引用している。リフキンは「ポストモダン論がモダンという障壁を打ち破り、そのなかの囚人を解放したものであるとして、ポストモダン論はその後囚人たちがどこに行き、どうすべきかについて指し示すことが何もなくしたものである」と述べている (R2, cited in A2,p.202)。

このうえにたつて、アテルイエヴィックはトランスモダン論に属

すと考えられる積極的な考え方として次のようなものを提示している。ただしこれらは、あくまでも、アテルイエヴィックが現時点における統一的トランスモダン論の内容をなすとしてまとめているものである。

2. トランスモダン論の考え方

トランスモダンの考え方を示すものとしてアテルイエヴィックが何よりもまず挙げるものは、「文化的創造行為という形で、水面下において革命が起きているという形で、社会的文化的変化が進行している (social cultural change)」という考え方である (A2,p.207)。これは前記のようにレイ／アンダーソンの考え方をいうものであるが、実はこれは著名な歴史研究家トインビー (Toynbee,A.) が、文化的転換がおきる時には、通常、その時の文化の限界にある5%の者 (5% of creative marginals) においては水面下で変革の準備がなされているものであると述べているところに依拠し (cited in A2,p.207)、レイ／アンダーソンが13年間にわたりアメリカについて調査してきたところによると、平均して24%の者がこれまでの伝来的ないしいわゆる近代的な文化はもう止め、なんらかの新しい生活様式 (way of life) をとるべきであると考えているという結果になったことに基くものである。レイ／アンダーソンは、この新しい生活方式を「文化的創造行為」と名づけ、広く広める運動を進めているのである (文献 R1)。

現在その中心的な考え方となっているものは、例えば“Wikipedia: the Free Encyclopedia”によると、次の5項目である。すなわち①世俗的事情と信条 (briefs) との一致した生活、つまり真正な生活 (authenticity) をおくるようにすること、②この世界について互いに結び合ったものとみて行動し学ぶ態度を持ち、そしてそれをさらに促進するようにすること、③理想主義 (idealism) と行動主義 (activism) の考えにたつようにすること、④グローバルの関係尊重と自然保護の立場にたつようにすること、⑤女性の役割・意義を尊重するように努めることである (C2,p.2)。

ちなみに、同欄記事では、この「文化的創造行為」論が現時点におけるトランスモダン論の具体的代表的なものとして紹介されている。そしてその賛同者はアメリカ成人ではすでに約5千万人 (全体の約4分の1) を数えるといわれる (C2,p.1)。またヨーロッパではEU委員会統計局がレイ／アンダーソンと同様な方法でヨーロッパについて調査したところ、約20%がこれに賛同という結果になっている。アテルイエヴィックは、アジア等でも同様な結果になるであろうといっている (A2,p.208)。

以上の「文化的創造行為」の考え方はトランスモダン論の総論的なものと位置づけられるが、内容的にそれを補完するものとして分野別に次のようなものがある。ただしこれは、グヒシがトランスモダン社会実現の5段階説 (five levels of transmodern transformation) として提示しているものを拡充し、分野別に整理しさらに発展させたものである。グヒシの5段階説について詳

しくは拙稿 (Q4) をみていただきたいが、要するにトランスモダン社会の実現は図2における①→⑤のような5段階の形で進むとするものである。

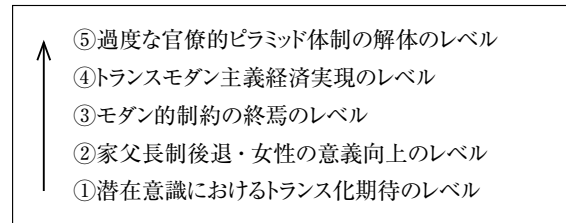


図2：トランスモダニティ実現のための5つのレベル・概念図 (出所：G1)

トランスモダン論の補完的テーゼの第1は「意識の面における変化を促進する動きが進んでいることをいうもので、具体的には内省的な生活システム・パラダイムを形成すること (changes in consciousness: the reflective/living-systems paradigm)」をいう。これは直接的にはエルギン (Elgin,D.) が独自の調査と研究者等の見解に基づき提起しているもので (E2, cited in A2,p.208)、人々の生活信条がグローバル性を意識的に認識するものとなって、旧来の考え方に囚われない進化的なものとなっていること、日常生活では「人間らしい生活」が送れるように絶えず内省が行われる形で進むようになってきていること、もしくはそうしたことを求めるようなものになっていることをいうものである。さらにこれに関連して、世界中の価値観についての調査に基づき、イングレハート (Inglehart,R.) らによって、特に世代間における変遷・変化をふまえて、人間生活のあり方についての考え方において静かな革命が進んでいることが提唱されている (I, cited in A2,p.209)。一言でいえばこれらは、「人間らしい生活」を求める人たちが増えており、そうした社会、すなわちトランスモダン社会の実現が求められていることをいうものである。

補完的テーゼの第2は「社会的システムの面における変化をいうもので、具体的には世話する経済の形成というパートナーシップ・モデルを形成すること (changes in social systems: the partnership model of caring economies)」をいう。これは直接的にはアイスラー (Eisler, R.) が提唱しているものである (E1, cited in A2,p.209)。アイスラーはこれまでの30年以上にわたる人間生活の歴史を究明し、これまでであった例えば宗教界と世俗界との対立、右翼の思潮と左翼の思潮との対抗の状況等を総括的にふまえ、結論的にいって結局、人間生活の本来のあり方はパートナーシップにあるという考え方を提起しているものである。前記のエルギンの主張が個々の人間の心のなかにおける内省に焦点をおくのに対し、アイスラーでは人間同士のパートナーシップ関係的な人間関係の形成に重点があり、社会性志向のものである。そうした社会をトランスモダンの社会として実現することに重点を置く主張である。

アイスラーの人類史研究で注目されることは、西暦紀元前

3500年ごろには家族は母親中心のもの(matrifocal)であった。しかしそれは、男性に対する女性の支配といったものではなく、あくまでも子供の生誕・養育や生活維持のうえで必要であったものであることが改めて提示されていることである(E1, cited in A2,p.209)。女性の意義尊重はトランスモダン論の絶対的主柱をなす原理である。ただしそれは、旧来のモダン時代あるいはポストモダン時代に見られたような女性の権利の一方的主張を良しとするものではない。

トランスモダン論者の見解によれば、こうした往時における女性権利の一方的な主張論は、当時における性商品化に照応するものであった。このことは、ある意味でポストモダンにおいて全く明らかになったものであるが、トランスモダン論ではこの両者は一体のものであって、両者をともに否定・排撃することが必要であり、そのうえでのみ真の男女同権・男女共同は実現されうると主張するのである。アイスラーの試みは、このことについての歴史的正当性を提示したものと評価される。

さらにアイスラーは、パートナーシップ・モデルを提起するに際し、アダム・スミスの有名な「市場の見えざる手」について言及し、アダム・スミスのこの命題は、市場関与者の無力性に立脚したもので、少なくとも今日では妥当しない。今日では市場決定性に従わない経済主体のケアリング活動が注目されるものとなっていると述べている(E1, cited in A2,p.210)。これは直接的にはモダンそしてポストモダンの象徴的存在であった「市場の絶対性」を批判する意味をもつ。

補完的テーゼの第3は「政治面における変化をいうもので、具体的にはヨーロッパ・ドリームと全生命圏政治を進めること(political change: the European Dream and biosphere politics)」をいう(A2,p.211)。ここでヨーロッパ・ドリームとは、リフキンが2005年の著(文献R2)で提起したもので、金儲け成功一辺倒的なアメリカン・ドリームに代わって、ヨーロッパで登場しつつあるとするものである。リフキンの規定によれば、それは生活の質(quality of life)の向上、環境などの持続的発展、平和と調和の追求を目指すものをいい、一言でいえば、持続的な文明(sustainable civilization)、人間精神の高揚(elevating of human spirit)を目標とするものである(R2, cited in A2,p.211)。

ただしそれは、経済活動における真の意味での効果性や効率性を否定するものではない。アメリカン・ドリームに代表される金銭的な「私的富」の追求を否定し、「共同の富」の推進という考えにたつもので、経済生活が相互依存関係(reciprocity)と信頼に立脚したものとなること、従って市場ではなく、ネットワーク性が経済活動の基礎となることを主張するものである。なお、トランスモダン論では、アメリカン・ドリームに代わってヨーロッパ・ドリームが追求目的になることは、グヒシの所論にもみられる(詳しくはΩ4)。

全生命圏政治は、旧来ヨーロッパで顕著にみられた国や地域の地理的な位置や事情に重きを置く地政学的政治(geopolitics)を放棄し、代わりに全地球規模の環境保持に重

点を置くべきことをいうものである。ここで強調されている地球規模における環境の持続的発展は、既述の女性の意義尊重と並ぶトランスモダン論の2大根本的主柱の1つである。

補完的テーゼの第4は「心理社会的な面における変化をいうもので、具体的には進化論的進歩を図る関係の意識を持つこと(evolutionary changes in psycho-social development: relational consciousness)」をいう(A2,p.212)。これは直接的にはイギリスの哲学者、バーフィールド(Barfield, O)が提示した人間意識の発展理論を援用したもので、これまでの近代的文明の進展により人間と自然との関係が薄れたことを反省し、自然との新しい関係を築き上げること、すなわち「自然という(人間の生みの親である)ボディに参加する関係を改めて創り直すこと(re-participate with the body of nature)」をいう。つまり自然とのより良いパートナーシップ関係を樹立することをいうもので、地球環境の持続的発展の命題を補完するものである。

補完的テーゼの第5は「関係性の質の面における変化をいうもので、具体的には循環性パラダイムと愛情倫理を促進すること(change in the quality of relationships: the circularity paradigm and love ethics)」をいう(A2,p.213)。ここで関係性というのは、自然環境ならびに社会的(人間同士の)環に対する個々の人間のあり方を問うもので、人間はその両者においてそれぞれの環(円)のなかで関係を持つところの存在であって、環の循環のなかで生きてゆくものであること、すなわち自然との交わり、他の人間との交わりのなかでのみ生きてゆけるものであり、男女間でも愛の倫理が不可欠であることをいうものである。

これに対していえば、男女間の愛においても旧来の家父長制のもとでは、所詮それは性欲があるだけのもので、愛がないもの(lovelessness)であり、非人間的なもの(dehumanization)であった。これを真に愛情のあるものすることがトランスモダン論の目指すところである。

アテルイエヴィックがトランスモダン論の基礎となる考え方として提示しているものは、実質的には以上であるが、最後にアテルイエヴィックは、少なくとも以上の考え方を包括する上位概念としてトランスモダンという統一的概念が必須であることを再度力説し、「ポストモダン論によって展開されてきた人種・性・伝統・文化・経済等々について打破すべき所説を超克するために必要であるところの、それとともに他方では、すべてのものにおいて他のものを支配したり、他に対し優越感を持つことのない全生命圏政治の出発点になるべき理論を可能にするところの、政治的認識論的立場を与えるものは、トランスモダンのそれである」と結んでいる(A2,p.216)。

VI. 小括—トランスモダン論の全般的特性

以上において本稿では、ポストモダン論のマイナス部分がトランスモダン論を生み進展させてきた経緯を明らかにした。トランスモダン論は多様であるが、以上をふまえて現時点で認められる共通の支柱的特性を要約的に述べ、結語としておきたい。

第1にトランスモダン論は、すでに本項冒頭で述べたように、ポストモダン論に対して反対・排撃の立場にたつものである。ポストモダン論により進められてきた、人々の耳目を引くものならばどのようなものでも推奨する考え方により社会的無秩序がもたらされ、人間の生存すら危うくなっていると、トランスモダン論者は主張する。

この点について一言補足しておきたい。ポストモダン論については、かねてからそれは旧来の考え方や概念の消滅、つまりリオタールのいう「大きな物語の終焉・崩壊」という側面が大々的にジャーナリストに喧伝され、脱構造化 (De-Strukturierung)、脱概念化 (De-Konzeptualisierung) に志向したものとされてきた。これに対しては、すでにドイツのベック (Beck, U.) などにより、その社会は実際には再構造化 (Re-Strukturierung)、再概念化 (Re-Konzeptualisierung) の社会としてとらえられるべきではないかということが批判的に指摘されてきた (文献 B1: 詳しくは①)。意味的にはトランスモダニティ論は、脱構造化ではなくて再構造化にこそ、現在社会の課題はあるというベックらの問題意識に通じるものである。

理論的にはこの点について、サーダー (Sardar, Z.) が次のように論じているところをさらに紹介しておきたい。サーダーはイスラム文化の観点から論陣を張っている世界的に著名な論客である。サーダーはトランスモダン論について、それはモダンとポストモダンの両者を超越する社会・時代であるととらえるとともに、ポストモダンにおける秩序破壊に対して、秩序再興を図るものがトランスモダン論であると規定し、その場合の秩序再興は、理論的にはカオスの理論 (chaos theory) によってなし得られるはずであると論じている。カオスの理論はカオスから秩序 (order) を見出すのに役立つはずのものであるからである (S2,p.5)。

トランスモダン論の支柱的特性として第2に、自然的ならびに社会的な環境の持続的発展を絶対的理念とするものであることが挙げられる。ただしこのことは、トランスモダン論では、人間の未来に希望を与えるものと表現されることが多い。例えばアテルイエヴィックは、「トランスモダンは一言でいえば人類に希望を与える楽観主義として特徴づけられるものである」とし (A2,p.203)、トランスモダンにおけるツーリズムは「ホープフル・ツーリズム (hopeful tourism)」として展開されるべきものであるといっている (文献 P)。

トランスモダン論の支柱的特性として第3に、真の意味での女性の意義尊重を絶対的な理念とするものであることが挙げられる。これは、上記の環境の持続的発展と並ぶトランスモダンの2大原理である。ただしそれは、既述のように、旧来的な女性権利の一方的な主張とは異なるものである。

トランスモダン論の支柱的特性の第4として、トランスモダン論は現在社会が諸国民・諸民族の平等な関係に立脚する、真の意味でのグローバル社会を築き上げようとするものであることが挙げられる。この点は本稿冒頭で述べた多元論的トランスモダン論が強く主張するところの、旧来植民地であったよう

な発展途上国や新興国における伝統的文化が正しく評価されトランス化され、それがトランス化された先進国文化と並ぶものとして発展・展開されるべきことを含むものである。

この点の意義について、既述で一言したサーダーは、要旨次のように、すなわち「世界の大学では、欧米的学問のみに終始しているが、新しいトランスモダン時代になれば、イスラム文化はじめ非欧米的文化が欧米文化と並ぶものとなる。そして今後数十年間の間には力の重点は西から東へ移転する。その時に欧米中心的な学問は、この急速に転換する現実に対しなんらの発言力も有しないものとなるであろう」と述べている (S2,p.3)。トランスモダン論は、こうした将来も見据えたものとして発展していることが大いに注目される。

参考文献

- A1: Ateljevic, I. (2011), Transmodern Critical Tourism Studies: A Call for Hope and Transformation, *Turismo em Análise*, pp.497-515, www; retrieved October 28, 2013.
- A2: Ateljevic, I. (2013), Visions of Transmodernity: A New Renaissance of our Human History? *Integral Review*, Vol.9, pp.200-219, www; retrieved November 22, 2013.
- B1: Beck, U., Bonß, W. und Lau, C. (2001), Theorie reflexiver Modernisierung— Fragestellungen, Hypothesen, Forschungsprogramme, in: Beck, U. und Bonß, W. (Hrsg.), *Die Modernisierung der Moderne*, Frankfurt (M): Suhrkamp.
- B2: Berger, J. (2004), Tethering the Butterfly: Revisiting Jameson's "Postmodernism and Consumer Society" and the Paradox of Resistance, <http://clogie.eserver.org/2004/berger.html>; accessed November 22, 2013.
- C1: Callinicos, A. (1989). *Against Postmodernism: A Marxist Critique*, Cambridge: Polity Press.
- C2: The Cultural Creatives, Wikipedia: the Free Encyclopedia, www; retrieved November 12, 2013.
- D1: Diener, B.A. (2011), Postmodernism and Consumer Society by Fredric Jameson, www; retrieved January 28, 2014.
- D2: Dussel, E. (2004), Transmodernity and Interculturality: An Interpretation from the Perspective of Philosophy of Liberation, www; retrieved October 28, 2013.
- E1: Eisler, R. (1987), *The Chalice and the Blade: Our History and Our Future*, San Francisco: Harper and Row.
- E2: Elgin, D. (1997), *Global Consciousness Change: Indicators of an Emerging Paradigm*, San Anselmo: Millennium Project.
- G1: Ghisi, M.L. (2010), Towards a Transmodern Transformation of Our Global Society: European Challenges and Opportunities, *Journal of Futures Studies*, Vol.15, pp.39-48, www; retrieved October 28, 2013.
- G2: Grosfoguel, R. (2009), A Decolonial Approach to Political Economy: Transmodernity, Border Thinking and Global Coloniality, *Kult 6 — Special Issue; Epistemologies of Transformation: The Latin American Decolonial Option and its Ramifications*, pp.10-38, www; retrieved October 28, 2013.
- H1: Transmodernism, Wikipedia: the Free Encyclopedia; retrieved November 12, 2013.
- H2: Transmodernity, Wikipedia: the Free Encyclopedia; retrieved November 12, 2013.
- I: Inglehart, R. (1997), *Modernization and Postmodernization*:

Cultural, Economic, and Political Change in 43 Societies, Princeton University Press.

- J1: Jameson, F. (1982), *Postmodernism and Consumer Society*, pp.1-12, www; retrieved November 12, 2013.
- J2: Jameson, F. (1998), *The Cultural Turn: Selected Writings on the Postmodern 1983-1998*, London: Verso. (合庭惇 / 河野真太郎 / 森邦生訳 (2006) 『カルチュラル・ターン』 作品社)
- M1: Magda, R.M.R. (1989), *La Sonrisa de Saturno: Hacia una Teoria Transmoderna*, Barcelona: ES: Anthropos.
- M2: Magda, R.M.R. (2004), *Transmodernity*, in: Magda, R.M.R., *Transmodernidad*, Chap.1, www; retrieved October 28, 2013.
- M3: Mura, A. (2012), *The Symbolic Function of Transmodernity, Language and Psychoanalysis*, pp.67-86, www; retrieved October 28, 2013.
- P: Pitchard, A., Morgan, N. and Ateljevic, I. (2011), *Hopeful Tourism: A New Transformative Perspective*, *Annals of Tourism Research*, Vol. 38, pp.941-963.
- R1: Ray, H.P. and Anderson, S.R. (2000), *The Cultural Creatives: How 50 Million People Are Changing the World*, New York: Harmoy Books.
- R2: Rifkin, J. (2005), *The European Dream: How Europe's Vision of the Future Is Quietly Eclipsing the American Dream*, New York: Penguin. (柴田裕之訳 (2006) 『ヨーロッパの夢』 日本放送協会)
- S1: Sardar, Z. (2004), *Islam and the West in a Transmodern World*, www; retrieved December 14, 2013.
- S2: Sardar, Z. (2012), *Transmodern Journeys: Future Studies and Higher Education*, www; retrieved December 14, 2013.
- S3: Singh P.R. (2011), *Consumer Culture and Postmodernism*, www; retrieved October 28, 2013.
- Q1: 大橋昭一 (2002) 「再帰的近代化の理論の概要—再帰的近代化の経営学のためのテーゼ—」『関西大学・商学論集』第47巻第4・5合併号
- Q2: 大橋昭一 (2011) 「現代レジャー理論の一考察—ポストモダニティ・レジャー理論を展望して—」『和歌山大学・観光学』第5号
- Q3: 大橋昭一 (2014a) 「ポストモダン社会と観光」大橋昭一 / 橋本和也 / 遠藤英樹 / 神田孝治編著『観光学ガイドブック—新しい知的領域への旅たち—』第4章、ナカニシヤ出版
- Q4: 大橋昭一 (2014b) 「トランスモダニティ論の勃興—現代社会をどうとらえるか: その基本的な類型—」『和歌山大学・経済理論』第376号
- Q5: 大橋昭一 (2014c) 「次世代型観光モデルについての考え方」和歌山大学観光学部編集・刊行『観光研究の高度化・国際化推進による次世代型観光モデルについての研究・第1回中間報告書』第1章

受理日 2014年6月18日